Cruises Historia

ゆたか倶楽部 よもやま話 vol. 14

クルーズご意見番〝初代クルーズマスター 松浦睦夫〟が語る

２００９年（平成21年）７月22日、日本の陸地では46年ぶりとなる皆既日食が観察されました。日食は、月が太陽の手前を横切るために、月によって太陽が隠される現象です。太陽が月によって全部隠される場合には「皆既日食」と呼ばれます。この時の日食は、日本全国で部分日食を見ることができ、口永良部島、屋久島、トカラ列島の島々、喜界島、奄美大島の一部、種子島の一部などが該当しました。日本で皆既日食が見られると言っても陸上は小さな島ばかりです。一斉に上陸することはとてもできず、多くの客船やフェリー・定期船が皆既日食ツアーを企画しました。

ゆたか倶楽部では2隻をチャーターし、日食クルーズを実施しました。一つはあるバンドによるライブパーティークルーズ企画の持ち込みでした。大手旅行会社数社に断られた中で「ゆたか倶楽部さんならやってくれるのでは」と助言を受け、私のもとにやってきました。すでにルーシ号にチャーター打診をしてあるというので、東京の代理店に電話で確認した上でこの話を引き受けることにしました。

ルーシ号は、１９８６年に当時のソ連書記長の名前にちなんでソ連海運省の客船「コンスタンチン・チェルネンコ」として建造されたロシアの貨客船です。ナホトカ港～横浜港の定期航路で活躍していましたがソ連崩壊によって１９９２年から民営化、名前も変更になりました。ウラジオストク港の開放を機に、１９９３年からウラジオストク港～伏木港（富山県）に航路変更し、週１回往復運行していました。船内は６段デッキで客室は１１４室、全室がシャワーとトイレ完備です。プールやバーがある広い甲板、ミュージックサロン、ナイトクラブなどパーティースペースもありました。ロシア側の乗客は特に日本の中古車を輸入する業者で、10×１００メートルの巨大船倉に車がぎっしり積まれていたそうです。

カボタージュ制度（国内安定輸送の確保の観点から自国内での旅客の輸送を自国籍船に限定する制度）に対して日食制度観測特例措置ができ、外国籍船でも日食を追って日本国内だけの航海（サービス）を行っても良いことになりました。ルーシ号は博多港（福岡県）発着で、トカラ列島の悪石島付近まで行き、中央皆既線上で日食を追いかけることができることになったのです。集客も船内の催しもお酒などの販売も全てバンド側で行われました。もしもの時、会社に迷惑をかけたくないと考え、前払いのチャーター費を私個人でお金を用意しました。出航前に、企画者のバンドのライブコンサートに招待されて行きましたが、音楽もお客様も若く、私はとても付いていけず、クルーズの添乗責任者は現社長の息子に託すことにしました。

私が添乗責任者として乗ったのは、もう一隻の「さんふらわあきりしま」です。大阪港～志布志港（鹿児島県）を往復する「さんふらわあ」の定期船で、志布志港に到着後からゆたか倶楽部のチャーターになり、トカラ列島中之島沖まで南下し、海上で皆既日食を観測し、志布志港経由で大阪港へ戻るという企画です。10時間だけのチャーターですが、大阪発着の２泊３日のクルーズツアーにして３００人のお客様が申し込みをしました。この話がまとまるまでには交渉の苦労がありました。船会社が「他にもチャーターしたがっている会社がある」と言ってきて値引きにはまったく応じません。後で聞くと、大阪から定期航路も往復利用する弊社の方が船会社としては良い条件だったのですが……。私の交渉力の弱さを実感いたしました。

こうして実施された2つの皆既日食クルーズ、当日の天候は生憎雨天となり残念な結果になりました。自然現象なので、観測できない場合もあるとお客様はもちろんわかってくださいますが、何百万もする大きな望遠鏡やカメラを持ち込んでいた方々に申し訳ない気持ちでいっぱいになりましたが仕方がありません。お客様は不満を漏らさず、そのマナーの良さに救われる思いでした。キャプテンは最後まで少しでも雲がないところを探してくれました。観測地点に着くと、日食のスタートに合わせて汽笛が鳴り、しばらくすると空が急激に暗くなり、気温も低くなってくる神秘の天体ショー、暗闇の洋上で不思議な体験をしました。

日本のクルーズ略史

2009年	日本で皆既日食クルーズ ▽トカラ列島沖で観測 さんふらわあきりしま、ルーシ、望星丸（東海大学の船）、あこがれ（大阪の帆船）、にっぽん丸 ▽北硫黄島沖で観測 飛鳥Ⅱ（世界一周の途中）、ふじ丸、ぱしふいっくびいなす、おがさわら丸、はばしま丸、コスタ・クラシカ